



# 金屋町通信

発行元：

金屋町まちづくり協議会

発行責任者：般若陽子

編集責任者：般若慎一郎

左上の写真は金屋町公民館です。昭和55年に北陸銀行金屋支店だった建物を買取り、2階に鑄物史料館を併設して開館しました。初代館長は故新保昭一さんです。金屋町の各種会合に、趣味のサークル活動に、夜間はほとんど毎日使われています。何よりも御印祭の拠点として、金屋町にはなくてはならない場所になっています。

あけまして  
おめでとございます

## 新年ご挨拶

金屋町まちづくり協議会

会長 般若陽子



平成23年(2011)を迎えるにあたり、皆様方のご健勝とご多幸を祈念申し上げます。

さて1611年9月21日に、当時は庄川の本流であった大河千保川の左岸5,000坪の土地に7人の鑄物師が招聘され、鑄物の火をともして以来400年を経て金屋町は今日に至りました。

今年の金屋町は大きな節目の年を迎えます。



高岡鑄物発祥の地として高岡地場産業の根幹をなし、時代の荒波を歩んできた歴史を振り返り、この町のこれからを考えますと、身の引き締まる思いがします。

9月11日に「金屋町400年記念フォーラム～次世代に継ぐものづくりと町づくり」を、9月12日に「金屋町400年記念式典と祝賀会」を、町づくり協議会と自治会が連携して開催予定しています。皆様方のお知恵とご協力で、400年を大きく盛り上げていきたいと念じています。

また町づくり協議会では町並み保存と、魅力ある町、品格ある町づくりを目指して、皆様と一緒に手を携えて活動していきたいと念じています。

どうかよろしくお願い申し上げます。

## 重伝建で町づくりの先進地

### 木曾平沢宿と奈良井宿を見学

町づくり協議会では11月21日に先進地視察研修会として、39名が参加し中山道の木曾平沢宿と奈良井宿を見学してきました。奈良井宿は昭和53年に、平沢宿は平成18年に国の重伝建保存地区に選定されています。



平沢の木曾漆器館

平沢宿は伝統的な漆器生産地で、現在も多くの工房で生産されています。平沢も奈良井も金屋町とよく似た「うなぎの寝床」のような建物ですが、平沢の場合は気温や湿度の変化に影響されやすい漆作業を行うための、塗蔵という作業用土蔵があるのが一番の特色です。伝統的な町並み保存と伝統産業である漆工芸のものづくりを組合せて町づくりをし、活性化を目指そうという考え方は金屋町のあり方にも示唆を与えるものと感じました。



平沢宿の町並み

て修景が進み、江戸時代に栄えた宿場町の情緒を見事に再現しています。観光協会の青木副会長に町並みを案内していただき、その後長泉寺において大橋住職から30数年前に町づくり活動として重伝建を目指した時の苦労話を、懇切に聞かせていただきました。

30数年前の当時は妻籠宿が町並み保存活動で先行し人気を集めていた頃ですが、若い女性が「アンアン」や「ノンノン」という雑誌を片手に奈良井を訪れるようになってきたそうです。アンケートなどで意識調査したところ、奈良井には妻籠にない良さ、つまり独自の人情があるという感想などにヒントを得て町づくり活動が始まり、住職が実行委員長を務めたそうです。



奈良井宿の町並み

奈良井の場合は修景するにあたって行政や学者の主導に任せることなく、地元の大工さんとのつながりなど独自性を大事にした。また住民の生活しやすさを第一に考え、車の進入禁止などにはしていない。文化を大切にし、どのような生き方

奈良井は重伝建選定から既に30年以上を経れており、その間に国からの助成金を活用し

をするのか、どのような町にするのかを自分達で考え、行政に押し切られることなく主張することが大切とのことでした。

奈良井では町並み保存後も人口や世帯数は少し減少している。しかし標高千メートルの立地なので、空家でも夏には避暑の別荘として使われており、完全な空家は無い。町づくりに向けて、若い人は説得すれば案外分ってくれたが、年長者に意外と苦労した。今では町が活性化してきたことから、都会から戻ってくる若者も出てきている。文化を大切にし、時には常識を超えたことをすることも町づくりには大切である。

住職の奥様は若い頃に10年間ほど、高岡市で暮らしていたことがあるそうです。そんなことにもご縁を感じながら、話に耳を傾けてきました。

### 金屋町開町400年記念 シリーズ 金屋町と高岡鑄物の歴史

### ⑥ ヒット商品、塩釜

能登穴水の中居に、金屋町と同じく河内丹南を先祖とする鑄物師集団が少なくとも平安朝時代から住んでいて、色々な鑄物製品を作っていた。

特に、加賀藩3代目藩主前田利常の時代には、能登における製塩を藩が管理するようになり、中居産の塩釜を藩が買い上げて所有し、藩が製塩業者に貸し付けるなど、加賀藩の保護を受けて栄えていた。



ところがそこへ高岡産の塩釜が進出していくと、価格と熱効率で高岡産が優位に立ち、中居の塩釜を衰退させてしまった。中居では大正13年にはたたら火が完全に消えてしまった。今は立派な鑄物資料館があるだけです。